様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2022～2023
課題番号：２２Ｋ２０２２５

研究課題名（和文）JSL生徒に対する「書く」日本語教育実践システムの構築

研究課題名（英文）Construction of a Practical System in Japanese Language Education at a Writing Class for JSL Students

研究代表者
小林　美希（Kobayashi, Miki）

早稲田大学・国際学術院（日本語教育研究科）・助手

研究者番号：１０９６２０２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の高校に在籍し日本の大学への進学を希望している、日本語を第二言語として学ぶ生徒（Japanese as a Second Language Students：以下、JSL 生徒）の「書く」教育実践システムを構築することを目的とする。そのために、国内外の「書く」ことに関する文献調査および、JSL生徒、教師へのインタビュー調査を行い、現在、日本国内で行われている「書く」教育に対する課題と改善点を明らかにした。これらを踏まえた上で、具体的な日本語教育実践のデザインに向け、実際に日本の大学への進学を希望しているJSL生徒に対して「書く」実践と考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、日本語教育における「書く」ことの教育のみならず、第二言語教育、および、世界のライティング教育に対して重要な視点を示しているという点において意義があるといえる。日本における「書く」ことの教育、および世界におけるライティング教育では、言語知識や技能を重視する「言語重視」か、そして、自己の経験や思想を表現する「自己表現重視」か、という二分法的な議論が歴史的に繰り返されてきた。本研究では、そのような二分法的議論に問題提起した上で、今後、JSL生徒に対する教育は何を目指し、どのように実践を行っていくべきかを提示した。

研究成果の概要（英文）：This study is aimed to construct a practical system in Japanese language education at a writing class for JSL students who are enrolled in high schools in Japan and wish to get into a university in Japan. By referring to previous research, also conducting interview to JSL students and teachers, the direction of Japanese language education at a writing class for JSL students was envisioned.

研究分野：日本語教育

キーワード：年少者日本語教育　書く　リテラシー　JSL生徒

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、外国人労働者の日本における滞在の長期化、定住化が進み、日本の高校に在籍する日本語を母語としない生徒（Japanese as a Second Language Students：以下、JSL 生徒）の数が増加している。このような状況の中、彼らの高校卒業後の進路選択をどのように支えていくかが、新たな課題となってきている。日本の大学への進学を希望する多くの JSL 生徒は、総合型選抜等、大学入試で必要となる小論文を、第二言語である日本語で「書く」ことに困難を感じている。また、そのような困難に直面することによって、高校卒業後の進路に見通しが立てられずに、将来への不安も抱いている。親の都合によって来日し、日本社会で生きていかざるを得ない状況に置かれている JSL 生徒にとって、第二言語である日本語で「書く」ということは、大学受験という壁を乗り越えるためだけのものであるべきではない。日本語で「書く」ことを通して発達段階に応じた言語能力を身に付け、自己表現することで、アイデンティティを構築し、大学進学というキャリア形成を果たしていくことが求められる。

従来、JSL 児童生徒を対象にした日本語教育における「書く」指導では、日本語の普遍的な「規範」を教授し、日本語での読み書き能力を含む言語能力を身に付けるという「言語重視」の指導が中心に行われてきた。近年では、JSL 児童生徒の「書く」プロセスに着目した指導や、子どもの主体性あるいは複言語性を捉えた「自己表現重視」の指導に関する研究も徐々に進んできている。しかし、日本の大学への進学を希望している JSL 生徒に対し、発達段階に応じた言語能力を身に付けながら、アイデンティティの構築を支える「書く」教育をどのように行っていくべきか、具体的な実践や方向性に関する包括的な議論は進んでいない。

2023 年度から公立高校において、在籍学級における教育課程の一部の時間に替えて日本語指導を行うことができる「特別の教育課程」が導入されることが決定している。JSL 生徒に対する日本語教育の「書く」教育のあり方について、実践研究を通して議論し、「特別の教育課程」での実践が機能するよう指導体制を確立していく必要がある。

２．研究の目的

1．で述べた背景を踏まえ、本研究では、JSL生徒の認知的発達段階を考慮した「書く」教育実践システムを構築することを目的とする。本研究では、文献調査、高校生への日本語教育に関わる教師および、JSL生徒として日本で成長してきた大学生へのインタビュー調査、さらに筆者自身が行う教育実践を通して明らかにする点として、以下の3点を研究課題として設定した。

① 海外の移民受け入れ先進国では、移民の子どもに対する「書く」教育はどのように行われているのか。一方、日本国内の学校現場では、JSL生徒に対し、どのような「書く」教育が行われているのか。

② 日本の大学へ進学したJSL生徒は、高校で受けた「書く」教育をどのように捉え、意味づけているか。

③　①②に関する研究成果を踏まえ、JSL生徒に対する教育はどのように行われるべきか。

３．研究の方法

上掲の研究課題を明らかにするために、主に質的研究法を用い、以下のように研究を進めていった。

（１）文献調査

海外（主にオーストラリア、米国）における ESL ライティング教育に関する先行研究を検討し、歴史的変遷とその背景を整理した。その上で、日本語教育、および年少者日本語教育における「書

く」ことの研究を批判的に検討し、「書く」教育に見られる課題を指摘した。

（2）JSL 生徒／大学生・教師へのインタビュー調査
国内の高校において JSL 生徒への日本語指導に携わっている教員、JSL 生徒、JSL 生徒として日本の高校に通い、日本の大学に進学した大学生に対して半構造化インタビューを実施し、SCAT（Steps for Cording and Theorization 大谷 2019）を用い分析を進めた。

（3）日本語教育実践のデザインと実施
文献調査、およびインタビュー調査を踏まえ、「言語重視・自己表現重視」の実践を行った。教育実践の分析は、エピソード記述（鯨岡 2005）を用いて行った。

４．研究成果
JSL 生徒の認知的発達段階を考慮した「書く」教育実践システムを構築するために、以下、4 節（1）から（3）で示す 3 つの視点から研究成果を述べる。その上で、（4）では、今後の日本語教育実践における「書く」教育のあり方について、具体的な方向性を論じる。

（1）文献調査から
本研究では、海外における ESL ライティング教育に関する文献調査によって、ライティング教育の歴史的変遷を追った。文献調査を通して、ライティング教育においては、語彙や文型、文法を定着させるという考え方に基づく「制限作文アプローチ」や「新旧レトリックアプローチ」を経て、1980 年代には、書き手が「書く」過程を重視し、個性や自由を重視しながら書き手の自己表現に重きを置く「プロセス・アプローチ」へと移行していったことが分かった（Silva1990）。さらに、近年では、「プロセス・アプローチ」を修正する「ポスト・プロセス」の動きとして、普遍的な社会的規範としての言語構造を明示的に教授しようとする立場と、文脈の中で実際の言語使用によって暗示的に気付きを促そうとする立場の 2 つに大きく分かれることが明らかになった。さらに、このように、明示的な教授をするべきか、暗示的な教授をすべきか、あるいは「言語重視」か「自己表現重視」か、という二分法的議論は、日本語教育および、年少者日本語教育における「書く」教育にも見られることを論じた。その上で、本研究で焦点を当てている JSL 生徒のことばの学びを捉える上では、子どもの「成長・発達段階」という視点から「ことばの力」を捉え、そのような「ことばの力」を育んでいくためにはどのような指導が必要かということを考える必要があること、そして、教師の認識論的立場により、「言語重視」か「自己表現重視」か、という二分法的議論で実践を進めていくことができないということを指摘した。

（2）インタビュー調査から
生徒・学生へのインタビュー調査
筆者自身が高校において日本語指導を担当した JSL 生徒に対し、高校在学時、および大学 1 年生から 3 年生という長期間にわたり、インタビューを行った。3 年以上にわたり継続的にインタビュー調査を行うことにより、研究協力者の日本語に対する捉え方に対する意味づけが、時間の経過と環境の変化によって、どのように変容していくのかが明らかになった。その結果、研究協力者の日本語や日本語を含む複数言語学習に対する捉え方は、一定ではなく、さまざまなライフイベントを通して、日本語の存在が大きくなったり小さくなったりしながら、成長と共に、そして、新たな人との出会いや環境の変化とともに変容していっていることが明らかになった。また、そのような日本語に対する捉え方の変容は、自身が有する複言語性に対する肯定的評価とそれぞれの言語能力に対する否定的評価と密接に関連しながら生じていることが明らかになった。

日本語教育に携わる教師へのインタビュー調査
外国人集住地域で日本語指導および日本語指導コーディネーターを担当している高校の教員にインタビュー調査を行った。多くの JSL 生徒が在籍している学校において、どのように JSL 生徒と向き合い、カリキュラムを作成し、実際に指導を行っているのか、指導の現状を把握した。その結果、日本語教育を専門としていない国語科等の教科担当の教員が、日本語教育について自ら学びながら対応している状況や、さまざまな日本語能力のレベルの生徒が在籍する中、限られた人数の教員で対応するために、苦慮している状況が明らかになった。また、そのような学校ごとの状況を把握し、統括して指導体制を構築する日本語教育を専門とするコーディネーターの重要性が示唆された。

（3）日本語教育実践を行った視点から
筆者が日本語の教員として勤務する国内私立高校において、日本の大学への進学を希望する高校 3 年生を対象に日本語教育実践を進めていった。本研究開始前、筆者は、「書く」ことを通して「自己表現」をすることで、生徒が自身の複言語性に気付き、JSL 生徒のアイデンティティの構築を支える実践を行いたいと考えていた。このように、「自己表現重視」の実践を行っていた筆者が、文献調査やインタビュー調査の考察を踏まえて、さらなる実践を行い、省察を重ねることで、どのように「言語重視・自己表現重視」の実践を行っていったのかを詳細に記述し、

研究論文として発表した。これまで「言語重視」か「自己表現重視」か、と 2 つの方向性で分けて考えられる傾向があった年少者日本語教育における「書く」研究に対し、「言語」と「自己表現」は不可分であること、そして、「言語重視・自己表現重視」の教育実践を行うことが可能であることを示した。

（4） 年少者日本語教育実践における「書く」教育システムの構築へ向けて

以上の考察の結果を踏まえ、JSL 生徒の認知的発達段階を考慮した「書く」教育実践システムを構築するために、以下の観点が必要であることを示した。1 つ目は、JSL 生徒自身が、リテラシーを多面的に捉える視点を養い、自身の複言語性に対し肯定的な自己意識を持てるようになるような場を構築するという点である。2 つ目は、普遍的・規範的か、個別的・流動的か、あるいは、明示的な教授をするべきか否かという方法論の対立を超え、多様なリテラシーの総体としての「ことばの力」の育成を目指すという点である。以上の観点を踏まえ、親の都合によって移動をし、さまざまな葛藤を抱えながら日本語を学ぶ JSL 生徒のことばの学びを捉える上で、批判的リテラシー教育に基づく視点を育むことが有益であることを、具体的な実践例の紹介とともに明らかにした。これらの研究成果は、国内・国際学会で発表するとともに、国内学術誌に、研究論文および展望論文として投稿した。

＜引用文献＞

大谷尚（2019）『質的研究の考え方－研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会

鯨岡峻（2005）『エピソード記述入門－実践と質的研究のために』東京大学出版会

Silva, T.（1990） Second language composition instruction: Developments, issues, and directions in ESL. In Kroll(ed.) *Second Language Writing: Research insights for the classroom.* Cambridge, Cambridge University Press, pp.11-23

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小林美希	４．巻 34
２．論文標題 JSL生徒に対する「書く」教育のあり方を考える	５．発行年 2023年
３．雑誌名 早稲田日本語教育学	６．最初と最後の頁 105-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林美希	４．巻 36
２．論文標題 複数言語環境で育ってきた大学生は、日本語を含む複数言語とその学びをどのように意味づけているか―高校時代・大学入学後のインタビュー調査から	５．発行年 2024年
３．雑誌名 早稲田日本語教育学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 小林美希
２．発表標題 JSL高校生は日本語で「書く」ことや「ことばの学び」を どのように捉え、意味づけているか ―大学受験直後と大学入学後の語りから―
３．学会等名 早稲田大学日本語教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小林美希
２．発表標題 複数言語環境で育つ高校生のリテラシーを育成するための日本語教育のあり方を考える
３．学会等名 豪州日本研究学会研究大会 /国際繋生語大会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 小林美希
２．発表標題 複数言語環境で育ってきた大学生は，自身のことばの学びをどのように捉え，意味づけているか ―高校時代，大学入学後，3年間にわたるインタビュー調査から
３．学会等名 言語文化教育研究学会　第10回年次大会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関